

# De Profundisのテキスト史にみる同性愛性と ワイルド受容

諏訪友亮

初めに

実践女子大学公開講座・展示で取り扱った本間久雄（1886－1981）は、1928年にクリストファー・ミラード（Christopher Millard, 1872－1927; 筆名 Stuart Mason）の古書をロンドンのデュラウ書店（Dulau Co.）で入手した。その縁で、デュラウ書店を介し、オスカー・ワイルド（Oscar Wilde, 1854－1900）の次男ヴィヴィアン・ホランド（Vyvyan Holland, 1886－1967）と引き合わされ、ワイルドの*De Profundis*（以下、DBと略記）の文言が削除されていないヴァージョン<sup>1</sup>の閲覧と手書きでの書き写しを許された。本間久雄は1911年に『早稲田文学』上で「獄中記」というタイトルを付してワイルドのDBの翻訳を日本で初めて掲載し、翌年には新潮社から単行本として出版している（平田 8）。

ヴィヴィアン・ホランドが本間久雄のワイルドに対する熱意に感銘を受け、DBの閲覧・筆写に加えて、ワイルドの遺髪の一房を本間に贈った背景には、ワイルド研究が比較的盛んだった日本には馴染みのない文脈がある。それは、ワイルドが同性愛裁判ののち、イギリスでは真剣な研究の対象とは見なされなくなり、ようやく再評価の機運が高まったのは1950年代から1960年代にかけてのことだったということである。その複雑なセクシャリティーは単純化できないとはいえ“the most wonderful gay icon”（Holland, “As a Gay Icon” 28）とも称されるワイルドへの嫌悪はそれほどまでにイギリスで根強く残り、実際に男性の同性愛を裁く刑罰が戦後も維持され続けた。ワイルドに有罪判決が下った1890年代以降、彼はまさに、“the paradigmatic example for an emerging public definition of a new “type” of male sexual actor: ‘the homosexual’”（Cohen 2）となったのである。

同性愛、ひいてはセクシュアリティ全般について、フーコーは*Histoire de la sexualité*の中で「抑圧仮説」（“hypothèse répressive”；Foucault 18）を提唱し、ヴィクトリア朝から続くセクシュアリティの抑圧という物語が言説化することで、むしろセクシュアリティという観点によって人間を捉える見方を扇動したと考え、抑圧の過度な想定を批判した。しかし、フランスとは異なり、20世紀のあいだ長らく男性同士の性的行為が選択的に刑罰の対象になっていたイ

ギリスとアメリカ、その批評家であるジェフリー・ウィークスやイヴ・セジウィックらにとって、セクシュアリティの抑圧は目の前の現実であり、英語圏LGBTQスタディーズにおいても、「抑圧仮説」が採用されることはまずなかったと言っていいだろう。ウィークスにとっては、セクシュアリティは“a historical construction” (Weeks 12) であるというフコーの理解に留まらず、それが“a result . . . of social definitions and self-definitions, of struggles between those who have power to define and regulate, and those who resist” (31) という、進行形で作られる自己定義や戦いの結果であるという側面が重要なのである。

同性愛が晩年のワイルドの主要な論点になるにもかかわらず、DBはそれほど同性愛の視点から論じられてこなかった。ドイルンは従来のDBの読まれ方を2つにまとめ、1つはワイルドがDBの中でこれまでの行いを悔い改めているとする読み方であり、もう1つはそうした改悔が美学的なポーズに過ぎず、新たな自己形成 (“self-fashioning”) を示す作品であると解釈するものである (Doyle 547-48)。その上で、ドイルンは後者を支持し、DBでは同性愛的な新しい自己が作られようとしていると考える (548-550)。フォスターも同じく、DBの脈絡のないトーンに注目し、ワイルドは同性愛の罪により監獄で服役しつつも、“he had been—and still could be—an agent *in* a world that required duplicity and disguise for survival” (Foster 87; emphasis in original) なのであり、戦略的に同性愛的な言葉を変装させ隠そうとしているとする。こうした説を補強するように、近年の評伝ではワイルドは出獄後も“unapologetic, unrepentant, and even defiant about the crimes that sent him to prison” とし、服役後も臆することなく、ダグラスや他の男性との恋愛に戻っていくことが強調される (Frankel, *Oscar Wilde* “Prologue”)。

本稿では、まず初めに、ワイルドが収監時に書いた書き物の総称である“Prison Writings”のうち、ワイルドの死後1905年に初めて出版され、その後も様々な版を重ねてきたDBの成立について簡単に整理する。次に作品としては最もワイルド自身の同性愛を示唆するDBが、いったい誰を読者に想定していたのかという問題から、このテキストの同性愛性を検討する。後半では、現在われわれを取り巻くLGBTに対する環境の変化やゲイ・スタディーズの進展のもと、イギリスと生まれ故郷アイルランドで、ワイルドにつきまとう同性愛性がどのように受容されてきたのかを考えたい。

## 1. *De Profundis*の版

DBの手書き原稿と複数の版との関係は複雑を極めていいる。ワイルドはレ

ディング監獄に収監されていた1896年頃から1897年にかけて嘆願書や詩、そしてDBの原稿を含む多くの手紙を書き、それは現在“Prison Writings”もしくは“prison manuscript”と総称されている (Wilde, *The Annotated Prison Writings*; Small 2)。その中で特に同性愛の恋人だった、第9代クイーンズベリー侯爵の三男アルフレッド・ダグラス卿 (Lord Alfred Douglas, 1870–1945) に向けて書かれた書簡が、ワイルドの死後に遺産と遺稿の管財人に指名されたロバート・ロス (Robert Ross, 1869–1918) の編集を経てDBとして出版される。現在の研究で、ワイルドはレディング監獄で一定程度の書き物をする自由を与えられていたことが分かっており、DBの元になった手紙の原稿は、ワイルド自身で何度か清書したコピーだった可能性が指摘されている (Small 9)。現在、この原稿は大英図書館に収蔵されており、一方でこの原稿の写しとされるタイプ原稿にはいくつものヴァージョンが存在している<sup>2</sup>。

DBが最初に英語で出版されたのは1905年のことであり<sup>3</sup>、ロバート・ロスが、ダグラスなど関係者の名前を伏せた上で全体の3分の1程度の分量に縮約し、ワイルドの負債返済やワイルドの遺児たちの養育費を賄うために出版した。ロスはワイルドの出獄前後に、ワイルドから直接手書き原稿を受け取り、少なくとも4通の複写をタイプライターで取るように指示されており、このタイプ原稿を元にした初期の版にはロスが大きく関わっていることになる。

1905年版のDBはよく売れ、1908年には削除していた箇所を一部加えて、ロスが新たに増補版のDBを出版する。ロスは同年にワイルド全集の出版も行い、ワイルドの残された負債を完済する一方で、ワイルドの名誉回復や著作権の管理に携わる。さらに、ロスは今後50年間一般に公開しないようにする約束のもと、当時の大英博物館にDBの手書き原稿を預けた。

1913年、ダグラスがワイルドの伝記作家アーサー・ランサムに仕掛けた名誉毀損裁判の中で大英博物館に収められた原稿が明るみに出るなどを挟み、1949年には、ワイルドの次男ヴィヴィアン・ホランドが、タイプ原稿を元に、“*the First Complete and Accurate Version*” (Wilde, *De Profundis*) と銘打ったDBを出版する。

しかし、ヴィヴィアンが完全で正確とした版を出したにも関わらず、今度は1962年に編集者ルパート・ハートーデイヴィスが、1960年に開示された大英博物館の手書き原稿を正確に文字化し*The Complete Letters of Oscar Wilde*を刊行する。ハートーデイヴィスは、DBがもともとワイルドによってダグラス宛に書かれた手紙であるという側面を重視し、これまでDBとして流通してきたテキストを書簡全集の一部に加える編集方針を採用した。さらに、ヴィヴィアンによる1949年版にあった数百もの誤植を指摘し自らのテキストの正確性、正当

性を主張したことで、ハートデーヴィス版はそれまでの3つの版（1905年と1908年のロス版、1949年のヴィヴィアン版）に対する優位性を築き、DBの完全版をめぐる問題は終息したかに見えた。

## 2. *De Profundis*で想定される読者は誰か

2005年、イアン・スモール編集によるDBが*The Complete Works of Oscar Wilde*の一巻として出され、DBのテキストをめぐる問題が再燃することになる。この経緯は、宮崎かすみにより2020年に翻訳された『オスカー・ワイルド書簡集 新編獄中記』の「編訳者まえがき」でも詳しく述べられているが、以下では本稿の趣旨に合わせ、イアン・スモールの主張を整理したい。

スモールによれば、ハートデーヴィスによるロス版、ヴィヴィアン版の否定は“over-hasty”であり、DBを書簡集に収めてしまうことは、このテキストを作品として全集に収める機会を奪ってしまったばかりか、将来的に1つの文学作品にしようとしていた節のあるワイルドの意図に反しているとされる（Small 2-3）。出獄後、フランスのディエップでロスと落ち合ったワイルドは、そこでロスと議論を重ね、ダグラス宛の私的な手紙であるはずのテキストにペン入れをして校正した。ワイルドは、この原稿をダグラス以外の誰かに見せる価値があると判断していたのは確かであり、近年編集されたフランクル編集による注釈付き著作集もスモールの路線を踏襲し、書簡ではなくDBというタイトルを採用している（“*De Profundis* is far more than a personal letter and is today widely viewed as one of its author’s most important works”；Wilde, *The Annotated Prison Writings* 37）。つまり、ダグラス宛に書かれた私的な手紙と取るか、他の誰かに見せるべき作品の草稿と取るかでテキストに対する態度が分かれてしまうのである。このダグラス宛の手紙をスモールは「部分的な公開書簡」（“The Semi-Public Letter”）と呼び、作品になるべきだったもの、ワイルドの未完作品として扱われる方が良いだろうと言う（21, 24）。従って、スモールは今回の新しい全集として、手書き原稿を参照しつつも、ワイルドの意図を尊重し、ロス版とヴィヴィアン版を底本とする編集方針を採るに至る。

しかし、スモールの議論にも疑念がつきまとう。というのも、彼が見落としていると思われる点が、DBにある同性愛的な側面だと考えられるからである。確かにワイルドは出獄前にロスに宛てた手紙で、写しの一部を友人のアデラ・シュスター（Adela Schuster, c1859-1942）、作家フランセス・フォーブス・ロバートソン（Frances Forbes-Robertson, 1866-1956）の2人の女性に送るよう依頼している。けれど、それはあくまで親しい友人の女性たちであり、彼女たちが、同

性愛の関係にあった男性に対する直接的な罵倒や間接的な愛情表現で充滿したこのテキストを、男色の罪で告発する危険はほぼなかったからだと考えられる。

I wish sent, one copy to the Lady of Wimbledon [Adela Schuster] . . . the other to Frankie Forbes-Robertson. I know both these sweet women will be interested to know something of what is happening to my soul . . . . If Frankie wishes she can show it to her brother Eric, of whom I was always fond, but of course it is a strict secret from the general world. The Lady of Wimbledon will know that too. (Wilde, *The Complete Letters* 782)

同性愛のかどで刑務所にいるワイルドは、この同性愛的なテキストによって再び罪に問われることを恐れており、気心の知れた女性の友人2人とその兄弟の男性1人程度であれば、一般の読者に暴露されることはないと踏んでいる。そして、フランセス・フォーブス・ロバートソンの兄に手紙を見せることをワイルド自身は意図していないことから、異性愛の男性に読まれることには特に慎重な姿勢を取っている。つまり、この手紙の公開範囲は同性愛者のロスとダグラス、2人の女性の友人（あるいは監獄で手紙を預かる監獄長）までに制限されており、一般の読者に向けては公開が想定されていない<sup>4</sup>。

現に、ワイルドはダグラスへ私的に送った手紙をダグラスが一般に公開したり、ダグラスが詩集にワイルドへ献辞を書いて2人の間柄を公表することに強い憤りを表している。ダグラスがフランスの雑誌『メルキュール・ド・フランス』で自分の手紙を勝手に掲載すると聞き及び、ワイルドはこう述べている。

you are about to publish an article on me with specimens of my letters. He [Robert Sherard] asks me if it really was by my wish. I was greatly taken aback, and much annoyed, and gave orders that the thing was to be stopped at once. . . . But that you should seriously propose to publish selections from the balance was almost incredible to me. (716)

このように、ワイルドはDB以上にあからさまな愛情表現を用いている私的な手紙を一般に公開し、自らの同性愛の告白、いわゆるカミングアウトをするつもりはなく、同性愛の罪でさらに裁かれる危険を排除し、あくまで婉曲的で秘密にされた状態を望んでいることが窺える。

つまり、いま現在わたしたちが読める、ダグラスの名前などもまったく削除されていない手書き原稿にある、以下のような強い愛情表現は、当時の一般読

者に公開されるものではなかった。

Sins of the flesh are nothing. They are maladies for physicians to cure, if they should be cured. . . . do you really think that you were worthy of the love I was showing you then, or that for a single moment I thought you were? Do you really think that at any period in our friendship you were worthy of the love I showed you, or that for a single moment I thought you were? I knew you were not. But love does not traffic in a market place, nor use a huckster's scales. Its joy, like the joy of the intellect, is to feel itself alive. The aim of love is to love: no more, and no less. (714)

そしてワイルドは手書き原稿の最後で、ダグラスと海外での再会を望むことを伝える (“I will, if I feel able, arrange through Robbie to meet you in some quiet foreign town like Bruges”; 778)、つまり愛情が未だに続いていることを示し、ダグラスへの手紙を終えるわけだが、そしてこの手紙がダグラスの自分への愛情を蘇らせるよう仕向ける周到な仕掛けだったことに気づかせるわけだが、やはり、ワイルドはこうした強い愛情の吐露を一般に晒そうとは考えていなかった。

### 3. 19世紀末イギリスにおける同性愛の状況

同性愛を合法とするナポレオン法典の影響下にあったフランス、イタリア、スペインなどと異なり、1533年（実際の施行は1534年）にヘンリー8世によってThe Buggery Actが制定されて以来、イギリスでは長らく同性愛が刑事罰として裁かれてきた（Johnson 326）。ワイルドがレディング監獄から出て向かったのはフランスだったが、それは同性愛嫌悪が年々高まっていたとはいえ、フランスでは同性愛者を有罪にする法律がなかったからだ（Berrong 182）。ワイルドは1895年に2年間の重労働を伴う服役という、男色を取り締まるイギリスのソドミー法としては最も重い刑罰を与えられ、確かにイギリスの男性同性愛者に対する差別と抑圧は、他のヨーロッパ諸国に比べて際立って見える。

このことから、1990年代以降のワイルドの同性愛の側面を見る研究では、ワイルドを“the apogee of gay experience and expression”（Sinfield 2）と見て、裁判報道に表れる同性愛と異性愛の二項対立の強化や19世紀後半の同性愛を抑圧する新しい秩序の成立を指摘してきたが、近年では、こうしたやや分かりやすい構図は修正されつつある。確かに同性愛嫌悪の言説は根強くあったものの、アデュットによれば、①当時の司法側は貴族も多く関わる同性愛に対し刑罰の執

行をするには消極的であった、②社会的ステータスが高い人物は特に有罪になりにくかった、③名誉毀損で訴え返される恐れが高かった、④1885年の刑法改正は実質的に何も変わっておらず、むしろソドミー法を曖昧にさせた面もあった、⑤同性愛で訴えられた場合の有罪率が低かった、とされる (Adut 224-27)。にもかかわらず、ワイルドが異例の重い刑罰を受けたのは、ワイルドの訴訟相手であったダグラスの父クイーンズベリー侯爵の家族関係が崩壊し失うものがなかったこと、裁判という公開の形で同性愛が暴露されてしまい、メディアや大衆が相互作用的に熱狂を高め合うスキャンダルを生んでしまったことなど、複合的な要因が挙げられる (Adut 230-31)。つまり、当時から同性愛者と囁かれていたワイルドは、あからさまに性的指向が表に出ない限り、同性愛で有罪になった可能性は低く、ワイルドがダグラスの父クイーンズベリー侯爵を名誉毀損で訴え、その過程で同性愛が暴露されるようなことがなければ、恐らく収監されるようなことにはならなかった。

ワイルドがDBの原稿によって自らの同性愛が公開されることを恐れていたことから分かるように、表に出るという禁忌を犯さず名指されぬ形であれば、同性愛もある程度は安全だったのであり、それは「あえて名前を名乗らぬ愛」(“the Love that dares not tell its name”; Wilde, *The Complete Letters* 703) であることを求められていた。閲覧者が非常に限定された手紙という私的な空間でのみ伝達される同性愛、公共では決して言葉にされないその愛は、まさにセジウィックが一連の著作で焦点を当てた同性愛の抑圧、クローゼットの中に隠れざるをえない秘密の状態であり (Sedgwick, *Between Men* 94-5; *Epistemology* 67-8)、同性愛者たちは異性愛性と同性愛嫌悪によって満たされた公的空間を避け、私的な空間へ引きこもらなくてはならなかったのである。

#### 4. イギリスとアイルランドのワイルド受容

ワイルドを同性愛という観点から論じやすくなった現在の環境は、これまでのワイルド受容史におけるLGBTQスタディーズの進展と切り離すことはできないだろう。そこで、ここからはイギリスとアイルランドにおけるワイルドの評価を概観し、積み重ねられた同性愛擁護の歴史とワイルドの受容を関連づけてみたい。

ワイルドの著作はバイセクシュアルだった女性作家キャサリン・マンスフィールド (Katherine Mansfield, 1888-1923) やゲイの男性作家E・M・フォスター (E. M. Foster, 1879-1970) らに影響を与えたことは指摘されている (Bristow 20-1; Wilper 139, 149-52)。本間久雄が買い取った資料の元所有者で初期ワイルド

研究に貢献したクリストファー・ミラーも同性愛者だった。このように、長らくワイルドの著作は“his central role in the formation of a twentieth-century canon of openly gay writing” (Evangelista 18) という位置を占め同性愛コミュニティーで脈々と読みつがれてきたが、ワイルドのイギリス社会における名誉回復と再評価はかなり遅れた経緯がある。

ワイルドの孫マーリン・ホランドによれば、1948年に出版されたワイルドの裁判関連の著作に対する書評で、元法務官の書き手はワイルド事件を“cesspit”、ワイルドを“social leper”と呼んでおり、ワイルドの死後50年近く経っても、彼に対する根強い嫌悪感があったことを示している (Holland, “The Posthumous” 43)。その流れを変えたのが、1962年に出版されたルパート・ハートーデヴィスの *The Complete Letters of Oscar Wilde* だったのであり、全書簡集の刊行を境にワイルドが文学者として真剣な研究対象となるに及び (Holland, “The Posthumous” 44-5)、ワイルド研究の書籍が多く出版されることになる。イングランドでは1967年に私的な男性間の恋愛が違法でなくなり、ワイルド裁判以後も半世紀にわたって同性愛者たちに沈黙を強いていた刑罰が撤廃されたことになる。1990年代からはワイルドの同性愛に焦点を当てた著作が本格的に出版され、LGBTを擁護する近年の潮流の中にワイルド研究もある。

ワイルドが生後20年間を過ごしたアイルランドでは、イギリスとは異なり、一層入り組んだワイルドの受け取られ方がされた。また、言うまでもなく、それはアイルランドの同性愛に対する見方に加え、イギリスへの姿勢とも密接に結びついている。ワイルド裁判当時、まだイギリスの植民地だったアイルランドではイギリスほどに裁判が新聞で報じられなかったが、1884年のダブリン城における同性愛スキャンダルが新聞を賑わせたのとは対照的に、アイルランドを代表する作家がイギリスで恥辱にまみれる事件が、イギリスに対抗する意識の高揚につながるものと見なされたからだった (Doody 57)。つまり、19世紀後半から20世紀初めにかけては、性的スキャンダルよりもナショナリズムに資するかどうか優先されていたことになる。

ワイルドの死後、20世紀前半のイギリスで彼はほとんど忘れられていたに等しい状況だったのとは異なり、アイルランドでは作家たちによりワイルドが文学的考察の対象になっていた。特にジェイムズ・ジョイス (James Joyce, 1882-1941)、W・B・イエイツ (W. B. Yeats, 1865-1939)、バーナード・ショウ (George Bernard Shaw, 1856-1950) らは、アイルランドにおいて、またはイギリスにおいて周縁化した自らの芸術家としての立場をワイルドと重ね、彼を犠牲者として映し出している。こうした、アイルランド出身の作家がイギリスの性と社会のコードに反抗し敗れるという姿は、彼らにとって、二の舞を演じないための



教訓となっていた（Walshe 24-8）。

しかし、アイルランドもイギリスと同様、1885年に改正された、同性愛を非合法として扱うイギリスの刑法を維持し続けた。ここにアイルランド特有のセクシュアリティの統制が加わり、1920年代の映画と出版物における性的表現の検閲法、1935年の刑法改正、出会いの場としてのダンスホールを認可制にする法案を経て、カトリック教会の道徳的価値観が社会全体に浸透し始める。1946年に、ある刑務所の3割が同性愛の受刑者で占められ、他の受刑者とは接触を禁じられていた（Walshe 31-2）。

本間久雄のほかにヴィヴィアン・ホランドがワイルドの遺髪を贈ったもう一人の人物である（Holland, “A Strange Photo” 7）、アイルランドの劇作家ミホール・マクリアモー（Micheál MacLiamóir, 1899–1978）は、性の規律が強まる中にあって、ワイルド評価において孤軍奮闘する。イングランド生まれにも関わらず、名前をアイルランド語風に変え、自らをまったく作り変えたマクリアモーは、イギリスと同じく同性愛が刑罰として裁かれたアイルランドにおいて、ゲイであることをオープンにした貴重な例外だった。マクリアモーは、パートナーの演出家ヒルトン・エドワーズ（Hilton Edwards）とともに1928年にゲート・シアターを設立した。国民劇場のアビー・シアターと現在でも双璧を成すこの劇場は、1930年代にワイルドの全戯曲を上演し、ヨーロッパ近代演劇の古典を上演するなど、国産の劇にこだわるアビー・シアターとの違いを鮮明にし、よりコスモポリタンな傾向をまもっていた。1963年にはワイルドを主人公にした戯曲『オスカーであることが肝心』(*The Importance of Being Oscar*)を上演、異性愛者としてワイルドを描くなど、法に触れない“‘safe’ version”（Walshe 55）のワイルド像を提示したとはいえ、ワイルドがアイルランドの文化シーンに登場する機会を作り続けた。

アイルランドで同性愛が合法化されたのは1993年のことであり、1967年には事実上合法になったイギリスと比べてもだいぶ遅れていたのだが、それ以降は同性愛者の権利を保護する法の制定が進み、1998年に性的指向に基づいた差別の禁止、2015年には同性婚が可能となり、現在は同性カップルによる養子縁組などもできるようになっている。それを象徴するように、2017年にはゲイであることを公表していたインド系のリオ・バラドカー（Leo Varadkar, 1979–）が38歳で首相に就任し、アイルランドにおけるLGBTの権利が急速に進んだことを内外に示す象徴的な出来事となった。

ワイルドの同性愛をめぐる議論も、こうした流れのもとにオープンになり、かつては在校した歴史を認めたがらなかったワイルドの母校トリニティー・カレッジ・ダブリンやポートラ・ロイヤル・スクールも、積極的にワイルドとい

うアイコンを受け入れ始め、“Irish institutions that had silenced Wilde’s name . . . in the 1990s used him as an emblem of liberalisation and inclusiveness, and his name now stood as a kind of shorthand for tolerance and acceptance”になるまでに至っている (Walshe 90)。そして文学においては、ワイルドの影響下からゲイの作家コルト・トビン (Colm Tóibín, 1955-) やレズビアン作家のエマ・ドノヒュー (Emma Donoghue, 1969-) などの人気作家が輩出され、ワイルドのセクシュアリティはアイルランド人であること (Irishness) と同時にイギリス人でもあること、そしてゲイでもあることが共存するよう受け止められるようになっている。

### 終わりに

ワイルドのDBは、執筆と出版をめぐる経緯の複雑さから、書簡と取るか作品と取るかでまったく異なる性格を示すテキストだった。近年では手書き原稿を重視して書簡集に収めるべきか、ワイルドの意図を汲んで未完とはいえ作品として取り扱うべきかという議論が再燃している。本稿では、DBとワイルドの手紙の分析から、ワイルド自身は、ダグラスに宛てた手紙の公開範囲を厳しく設定しており、またも同性愛によって罰されることを恐れていることを指摘した。あくまで彼の同性愛は名指されぬ状態に留まることが望まれており、現在のような完全な手紙の公開をワイルドは想定していなかったことになる。

19世紀イギリスの同性愛者に対する引き締めは、従来思われていたほど苛烈ではないことが知られ、当局は同性愛者に刑罰を与えることに積極的ではなかった。にもかかわらず、ワイルドが厳しく罰せられたのは、公然の秘密であった彼の性的指向が裁判という公開の場で晒され、一大スキャンダルへと発展したからであり、実際のところワイルドは事を荒立てずに無罪で済む余地も残されていた。しかしそれでもなお、当時の同性愛とは、自らの性的指向について沈黙することで初めて許容されるものであり、クローゼットの中に隠れ潜むことを強いられる愛の形だった。

イギリスにおいて、ワイルドは長らく作家として再評価されず、1960年代のワイルド書簡全集の出版や同性愛の合法化を経て、彼の同性愛も正面から受け止められる流れが作られた。対してアイルランドでは、ワイルドと同時代の作家たちが自らの疎外された立場を重ねるようにワイルドを評価して以降は、国家によってセクシュアリティが抑圧される時期を経て、ミホール・マクリアモーによるワイルド作品の上演やワイルドを主人公にした演劇作品によって、ワイルドが芸術家として見られる傾向は続いていた。そして、同性愛の合法化がなされたのが1990年代と遅れたものの、現在では同性婚も認められ、ゲイの

政治的リーダーが誕生するなど、急速に同性愛の権利獲得が進むに及び、ワイルドの性をめぐる議論もオープンになり、ワイルドはアイルランド人であると同時にイギリス人でもありゲイでもある主体として認知されるようになっていく。ワイルドの同性愛はタブー視され、あえて名乗らぬ愛だった状態から、ワイルドの評価と同性愛の権利獲得に向けた戦いの積み重ねにより、ようやく名乗られる愛になったと言えるだろう。

#### 注

- 1 恐らくヴィヴィアン編集の*De Profundis: Being the First Complete and Accurate Version of "Epistola: in Carcere et Vinculis"* (1949) の元になったタイプ原稿と思われる。
- 2 手書き原稿と現存しているタイプ原稿との関係についてはSmallによる派生図を参照のこと (Small, "Introduction" 30)。
- 3 なお、ドイツ語の翻訳は英語版よりも早く出版されている。
- 4 さらに、アデラ・シュスターとフランセス・フォーブス・ロバートソンに渡すよう指示された手紙の箇所 (Wilde, *The Complete Letters* 781-82) は、冒頭こそダグラス親子に対する恨みや肉体的快樂に耽溺したことへの後悔を書いている部分こそあれ、有名な芸術論やキリスト論を展開する、同性愛的欲望が抑制された箇所であり ("And the end of it . . . between Art and myself there is none" 728-56)、ワイルドがいかに2人にさえ核心的な部分が読まれないように注意を払っていたかが分かる。

#### 引用文献

- Adut, Ari. "A Theory of Scandal: Victorians, Homosexuality, and the Fall of Oscar Wilde." *The American Journal of Sociology*, vol. 111, no. 1, 2005, pp. 213-248.
- Berrong, Richard M. "A French Reaction to the Wilde Affair and Increasing Homophobia in Late-Nineteenth-Century France: Pierre Loti's Judith Renaudin." *Neophilologus*, vol. 95, no. 2, 2010, pp. 177-189.
- Bristow, Joseph. "Picturing His Exact Decadence: The British Reception of Oscar Wilde." *The Reception of Oscar Wilde in Europe*. Edited by Stefano Evangelista. Bloomsbury, 2010.
- Cohen, Ed. *Talk on the Wilde Side*. Routledge, 1993.
- Doody, Noreen. "Performance and Place: Oscar Wilde and the Irish National Interest." *The Reception of Oscar Wilde in Europe*. Edited by Stefano Evangelista. Bloomsbury,

- 2010.
- Doynen, Michael R. "Oscar Wilde's *De Profundis*: Homosexual Self-Fashioning on the Other Side of Scandal." *Victorian Literature and Culture*, vol. 27, no. 2, 1999, pp. 547-566.
- Evangelista, Stefano. "Introduction: Oscar Wilde: European by Sympathy." *The Reception of Oscar Wilde in Europe*. Edited by Stefano Evangelista. Bloomsbury, 2010.
- Foster, David. "Oscar Wilde, *De Profundis*, and the Rhetoric of Agency." *Papers on Language and Literature*, vol. 37, no. 1, 2001, pp. 85-110.
- Foucault, Michel. *Histoire de la sexualité I: La volonté de savoir*. Gallimard, 1976.
- Frankel, Nicholas. *Oscar Wilde: The Unrepentant Years*. E-book, ed., Harvard UP, 2017. EPUB.
- Holland, Merlin. "'As a Gay Icon, Wilde is Flawed'." Interview by Julia Ann Charpentier. *The Gay & Lesbian Review Worldwide*, vol. 15, no. 4, 2008, pp. 28-9.
- . "A Strange Photo Yields Its Hidden History." 『実践英文學』 第73巻、pp.5-8。
- . "The Posthumous Reputation of Oscar Wilde." *The Wildean*, vol. 50, 2017, pp. 41-46.
- Johnson, Paul. "Buggery and Parliament, 1533–2017." *Parliamentary History*, vol. 38, no. 3, 2019, pp. 325-341.
- Sedgwick, Eve K. *Between Men: English Literature and Male Homosocial Desire*. Columbia UP, 1985.
- . *Epistemology of the Closet*. U of California P, 1990.
- Sinfield, Alan. *The Wilde Century: Effeminacy, Oscar Wilde and the Queer Moment*. Columbia UP, 1994.
- Small, Ian. "Introduction." *The Complete Works of Oscar Wilde*. Edited by Ian Small. vol. 2, Oxford UP, 2005.
- Walshe, Eibhear. *Oscar's Shadow: Wilde, Homosexuality and Modern Ireland*. Cork UP, 2012.
- Weeks, Jeffrey. *Sexuality*. 4th ed., Routledge, 2017.
- Wilde, Oscar. *The Annotated Prison Writings of Oscar Wilde*. Edited by Nicholas Frankel. Harvard UP, 2018.
- . *The Complete Letters of Oscar Wilde*. Edited by Rupert Hart-Davis, and Merlin Holland. Harper Collins, 2000.
- . *De Profundis: Being the First Complete and Accurate Version of 'Epistola: In Carcere et Vinculis' the Last Prose Work in English of Oscar Wilde*. Edited by Vyvyan Holland. Methuen, 1949.
- Wilper, James. *Reconsidering the Emergence of the Gay Novel in English and German*. Purdue UP, 2016.
- 平田耀子 『本間久雄書誌』 雄松堂出版、2008年。
- ワイルド、オスカー 『オスカー・ワイルド書簡集—新編獄中記』 宮崎かすみ編訳、中央公論新社、2020。